

著者が語る
社会調査テキスト

桜井厚 一般社団法人日本ライフストーリー研究所 代表理事

『インタビューの社会学 ——ライフストーリーの聞き方』

二つのフィールドワークの経験をもとに

せりか書房
初版 2002年1月



ライフヒストリー調査のはじまり

本書は、私の長期のフィールドワークとそこにおけるインタビュー調査の経験がもとになって編まれたものである。副題のためか、質的調査のテキストと思って手に取ったら、とても難しい、わかりにくい、という意見を出版当初はよく耳にした。わかりにくいのは、おそらく一見テキスト風だが、そこには私のそれまでのフィールドワークの経験、すなわち論理や説明だけではなく経験に含まれる感覚や感情などの「思い」がこもっているからではないかと思う。そこで、この機会に本書の基盤となっている私の二つのフィールドワークの経験をいくらか説明することで、読者の理解に供することにしたい。

本書のテーマであるライフストーリー研究は、ライフヒストリー研究が母体である。ライフヒストリーの調査研究の歴史は古いが、今日のわが国の質的調査研究の一つにつながる動きは1980年前後に始まっている。日本社会学会大会でライフヒストリーの報告だけのセッションが初めて組まれたのは1981年、前年に日本社会学会長の中野卓が「個人の社会的調査研究について」と題して、ライフヒストリー調査研究の推進宣言をしたことが契機となった(中野, 1981)。私は中野の間近にいて、併走しながら自らのライフヒストリー法を模索し始めた時期である。

その頃、環境問題に社会科学分野からどう切り込むかという問題意識で結成された鳥越皓之をリーダーとする環境史グループに加わって、私も琵琶湖西岸(湖西)のむらでフィールドワークを行う機会に恵まれた。ここで私は人と水とのつきあいの歴史の変遷を、地域リーダーの一人の男の個人史と重

ね合わせる報告をした(桜井, 1984)。個人の人生を時系列的に再構成して地域の歴史的变化と交差させて、川や水利用の歴史的な意味変化を描き出そうと試みたのである。ライフヒストリーは個人の人生を時系列的に再構成することが暗黙の了解事項だったが、こうした点を含め、ライフヒストリーが量的調査の補助的位置から解放されて日本の社会学の研究方法論として正面から論じられたのは、さらに10年余あとのことである(中野・桜井編, 1995)。

環境調査から被差別部落調査へ

湖西で初めて何年にもおよぶフィールドワークを行った私は、柳田国男、有賀喜左衛門から中野を経由して鳥越へと引き継がれた「生活論」を実践的に学んで、環境史グループが方法として打ち出した「生活環境主義」にも共感をもった。しかし、ここでの「生活」は、上位社会の支配的な通俗道徳に対抗するむらの人びとの創造性という集合レベルの概念であり、同じ生活＝ライフとはいえず、私の関心は個人の生活世界にあった。そんな折、「生活史」を銘打つ調査の誘いがあり、突然、私は奈良県の被差別部落に入ることになった。このとき以来、主なフィールドが奈良県から再び滋賀県の、今度は琵琶湖の湖西の対岸、東側(湖東)の地域に変わったけれど、被差別部落のライフヒストリー／ライフストーリー調査は、私の30余年の調査経験の大半を占めることになる。この被差別部落の初期の調査経験が、私の研究法をライフヒストリーからライフストーリーへと転換させることになった。

初期のインタビューでまず気づかされたのは、調査者の常識や被差別部落カテゴリーに付着した私



達の根強い先入観、そして差別事象を執拗に聞き出そうとする調査者の態度などであり、それへの反省であった。文字おこしをしたインタビューのトランスクリプトからは、何が語られたかよりもどのように語られたか、聞き手と語り手の相互行為のあり方が鮮明になった。そこから調査者の先入観やインタビューの構え、語り手の語りがたさや沈黙など、話の内容だけではなく聞き方、語り方にも細心の注意が必要なることを思い知らされた。初期のトランスクリプトの報告集は、ライフストーリーの考え方をもとに語り手の人生経験をトピックごとの年代順に編集した。しかし、5,6年後には、インタビューの流れを尊重し語られたトピックの順序を変えることなく編集するよう変わった。インタビュー調査で気づいた語り方や相互行為を重視する必要性をはっきりと意識したからであった。

ライフストーリーの基本的構成

私が「ライフストーリー」という用語を使い始めたのは、1980年代の後半、被差別部落の語りの分析方法を考え始めたときである。リアルな語りの内容だけではなく、語り方やインタビューにおける語り手と聞き手のコミュニケーションのあり方などの言語的装置が視野に入ってきたのは、このときであった。これらのいくつかの視点は、私が社会学を学び始めた1970年代初頭から関心をもちつけてきたA・シュッツらの現象学的社会学理論が基礎になっている。インタビューの相互行為（ストーリー領域）と語られるライフ（物語世界）との二次元でライフストーリーの構成をとらえる伏線には、シュッツの多元的リアリティ論がある。

ライフストーリーがライフヒストリーと区別されるのは、ともに個人のライフに焦点化しているけれども、その理解、解釈のためには、ライフだけではなく語り手の評価や操作に焦点をあわせる点である。相互行為における、いわば「せめぎ合い」で物語のコンテクストが決まる。「ストーリー領域」を子細に見ることでコンテクストと語り手の感情や評価が明らかとなり、そのコンテクストに基づく「物語世界」の内容とそれへの思いを理解することができる。もっとも、本書では物語の構築に失敗した事例も紹介している。

被差別部落調査で気づいたのは、差別されている地域や人びとの中でも対立や葛藤があることだった。個人のライフと地域社会や解放運動との間に

は調和や同調だけでなく、葛藤や不満、反発や批判がある。それは、有賀社会学から引き継がれた地域社会レベルの「生活」が、たしかに個人のライフにとっては創造的に働き大きな力ともなりうるが、ときには足かせや抑圧にもなるという事実だった。生活世界は、マスター・ナラティヴ（構造的差別）、コミュニティのなかにあるモデル・ストーリー（解放運動や地域社会）、そしてパーソナル・ストーリー（個人、家族）によって重層的に構成されていると考えることで、個人の語りからも読み取れることがわかった。古くからある単純な三層モデルだが、ライフの語りを理解、解釈するための重要なコンテクストを提供するライフストーリーのモデルとなった。

私はライフストーリーの考え方を「対話的構築主義」と呼んだ。これは、いわゆるリアリティ派からも厳格な社会構築主義者からも批判を招いた。前者からの批判は語りの物語性への疑問や相互行為偏重に対してだが、それが私の主張であり、実証的なリアリティ派への批判でもあるから、立場の違いである。後者は、「構築主義」と称した点で、構築主義の正統性からはずれているという批判である。たしかに私は「ストーリー領域」に一定の構築性を認めながら「物語世界」には一定のリアルさを容認しているので、上記の批判はあながちまちがいはない。にもかかわらず、私は、このモデルを個人のライフストーリーを理解、解釈するツールとして、フィールドワークには十分であると考えているのである。「物語世界」と「ストーリー領域」の二つの位相を架橋するのは、シュッツなら差し詰め「リープ（飛躍）」と言うだろうが、私は「フィールドワークの経験」と言いたい。それは研究者コミュニティの論理整合性よりも、フィールドで出会った人たちの歴史に根ざした生活経験、なかでも語られる生活のリアルさや語りを操作する主体性を信頼するからである。

文献

- 桜井厚, 1984, 「川と水道——水と社会の変動」鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史——琵琶湖報告書』御茶の水書房: 163-204.
- 中野卓, 1981, 「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』32(1): 2-12.
- 中野卓・桜井厚編, 1995, 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.